

日本の医学界は「スペイン風邪」にどのように対応したか —医学・歴史学連携で大正時代の医学雑誌『日本之医界』を読み解く—

1918年3月以降、「スペイン風邪」が世界的に流行し、日本でも都市部や軍隊の駐屯地を中心に感染が広がっていきました。日本の医学界はこの「スペイン風邪」にどのように対応したのでしょうか。また、ウイルスがまだ確認・可視化されていなかった大正当時、病原体に関する議論はどのように展開されたのでしょうか。

2020年、東北大学災害科学国際研究所内で発足した「“スペイン風邪”文理連携勉強会」※は、医療業界誌『日本之医界』（東北大学附属図書館医学分館所蔵）を丹念に読み解く作業を続け、このたび、上記に関する論文を出版しました。医学と歴史学の連携による「総合知」の研究成果をぜひお聞きください。



東北大学災害科学国際研究所
歴史文化遺産保全学分野

川内 淳史 先生

青森県生まれ。関西学院大学大学院文学研究科文化歴史学専攻博士課程後期課程修了、博士（歴史学）。2018年より東北大学災害科学国際研究所准教授。専門は東北地方を中心とした日本近現代史、特に人びとの「生存」に関わる諸問題に関する地域社会史、医療・福祉史。歴史資料や災害資料の保存・活用についても研究。

※“スペイン風邪”文理連携勉強会

メンバー：三木康宏 准教授（基礎医学、医学系研究科）

川内淳史 准教授（歴史学、近現代医療史）

中鉢奈津子 特任准教授（科学コミュニケーション・異分野連携）

児玉栄一 教授（ウイルス学）

伊藤潔 東北大学名誉教授（災害産婦人科学、宮城県対がん協会細胞診センター所長）

2025年1月23日（木）
16:30~17:30

WEB 開催
(ZOOM)

本セミナーは医学系研究科系統講義コース科目等の授業として振替可能です

お申し込み・お問い合わせ

東北大学災害科学国際研究所

「災害と健康」プロジェクトユニット

<http://www.irides-pudh.med.tohoku.ac.jp>

